

臨床宗教師の可能性は

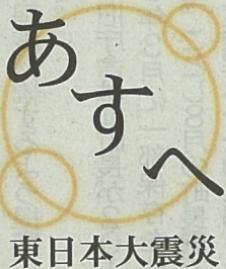
河内 15.12.16

仙台でシンポ 現状と将来探る

祈りと
震災

東日本大震災を契機に始
まつた宗教者の公共的な活
動を広く知つてもらうシン

ボジウム「いま知りたい
臨床宗教師」が6日、仙台
市青葉区の東北大であつ
た。宗教の違いを超えて被



災者らの苦悩に寄り添う臨
床宗教師の活動の現状や可
能性を探つた。

北海道東北臨床宗教師会

と、臨床宗教師研修を担う
東北大実践宗教学寄付講座
が主催し、市民や医療、福祉
関係者ら約200人が参加。
基調講演では同講座の
谷山洋三准教授が、被災者
支援が端緒になつた宗教師
の成り立ちや、約110人
の修了者が全国の病院や福
祉施設で患者やスタッフら

に対応している事例などを
紹介した。

宮城、新潟両県で活動す
る宗教師4人が志した理由
や体験を発表。臨床宗教師
会の高橋悦堂代表(36)＝栗
原市＝は「生老病死に直面
する医療、介護、福祉の現
場や他宗教から学ぶことは
多い。共に苦しむ人の支え
になりたい」と話した。

石巻赤十字病院(石巻市)
の鈴木聰副院長は医療者か
ら見た臨床宗教師の可能性
について述べた。「医学は
生や死の根源的な問いへの
答えを避けてきた。そこに
向き合つ宗教師は医療者を
育てる意味でも必要。單なる
技術ではなく、心が培わ
れる」と期待した。

臨床宗教師を取り上げた
河北新報の連載企画「挽歌
(ばんか)」の宛先 祈りと
震災」を担当した村上俊記
者(42)は「公共性を持つ宗
教師は、宗教と社会が新た
な関係を築く橋渡し役にな
り得る」と語つた。



臨床宗教師をテーマに意見を交わしたシンポジウム